令和７年度

北九州市立看護専門学校

一般入学試験

国 語 問 題 用 紙

（ 50分 ）

＜注意事項＞

1　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。

2　この問題冊子には、問題用紙が 17 ページまであります。

3　落丁・乱丁のある場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。

4　解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。
　① 受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄の数字をマークしてください。
　② 氏名欄に氏名・フリガナを記入してください。

5　問題冊子は回収します。

受 験 番 号

第1問　次の文章を読んで、後の問い（問1～問8）に答えなさい。なお、設問の都合上、表記を改めたところがある。

（注1）井上円了の『妖怪学講義』は、妖怪話を科学的に解明しようとした学問の発展から見れば一歩進んだものだった。それに対して1（注2）柳田国男の『遠野物語』は、山の神や里の神、天狗や河童などの妖怪や幽霊など遠野に伝わる話をまとめたものである。妖怪に対する科学的研究がすでにある中で、柳田はなぜ『遠野物語』を書いたのか？

円了と柳田の2人の間には17歳の年齢差があるが、2人の活動時期は重なっている。しかし、2人の間で妖怪学をめぐる論争のようなものはなかった。また、円了が柳田の研究に触れた記述は見当たらない。一方、柳田は円了の『妖怪学講義』を読んだうえで、その学説を批判している。柳田は1905年（明治38年）、31歳のときに発表した「幽冥談」の中で、次のように書いている。

僕は井上円了さんなどに対しては徹頭徹尾反対の意を表せざるを得ないのである。此頃妖怪学の講義などと云ふものがあるが、妖怪の説明などは井上円了さんに始ったのではない。徳川時代の学僧などに生意気な奴があって怪異弁談とか弁妄とか云ふやうな物を作って、妖怪と云ふものは吾々の心の迷から生ずるものであって決して不思議に思って怖るべきものでないと言って居る・・後略・・

（注3）石井はその著書『遠野物語の誕生』のなかで柳田と円了の関係を分析しており、迷信や妖怪に対する考え方の違いを指摘している。つまり、円了は合理的・実証的な考え方を基礎として、迷信の打破や妖怪の㋐ボクメツを目標とした。それに対して柳田国男は、「迷信」という言葉を避け「民間信仰」という言葉を重視し、迷信を「無知」として片付けるのではなく人々がなぜそう考えるのかを知ることが重要だとした。

後の人類学者・小松和彦も、柳田と同様の立場を取る。例えば、円了が「化け物屋敷でタヌキが拍子木を打つ」という現象を科学的に調べ、この音が屋根の雪が溶けてその下にあった竹の筒に落ちたときに発する音であることを突き止めたという逸話に対して、小松は次のように言う。

もし私が彼の立場にあったとしても、同様の行動をしていたであろう。しかし、その一方で、私はこの竹筒に落ちる雨だれの音をタヌキによる怪音と判断する、この地方の人々のaコスモロジーをも調べるであろう。怪音が聞こえてくる空間が夜の「背戸」の闇からであり、その闇の奥に妖怪タヌキが棲んでいる。この地方の人々はそう信じていたのである。

妖怪が「実際に存在するか否か」ということが大切なのではなく、その地方の人々が「妖怪は実際に存在すると考えていた」ということが重要なのである。つまり、人々が置かれている環境との関係性、そしてその環境の中で起こっている現象と人々との関係性こそが重要なのである。妖怪は「実在しない」にも関わらず、ある人にとっては見えるし、それがその人にとっての「リアリティ」として、その人の行動にも影響を及ぼすのである。そして、そのようなとてもイキイキとした「リアリティ」が、『遠野物語』には描かれている。つまり、妖怪を研究するということは、妖怪を生み出した「人間を研究する」ということに他ならない。

(注4) 内山によれば、１９６５年を境にして日本人はキツネにだまされなくなったという。ちょうどその頃、日本の人々が受け継いできた伝統的な精神が衰弱し、同時に日本の自然が開発によって大きく崩壊し始めた。その意味で、１９６５年当時、日本にはひとつの革命がもたらされていた、と内山は考える。

[2]１９６５年以前、日本の各地でたくさんの人間がキツネにだまされていた。内山は、次のように言う。

疑い深い人なら、本当にキツネのシ㋑ワザだったのだろうかと考えることだろう。私はそのことは問わない。かつては人々の生活世界のなかに、それが事実であったにせよなかったにせよ、キツネがたえず㋒カイニュウし、キツネのカイニュウを感じながら暮らしていたという、この事実だけを押さえておけばここでは十分である。実際村人は、このような話を疑うことはなかった。

さらに、付け加えて次のように言う。

それは、キツネにだまされていたという話が事実だったかどうかにかかわらず、なぜだまされなくなったのかを問いかけると、そこから多くの事実が浮かび上がるということである。出発点が事実かどうかにかかわらず、その考察過程ではいくつもの事実がみつけだされる。

かつて私たちは妖怪の存在を信じ、そのことによって精神的なバランスを保っていた。それが、高度経済成長時代、高度情報化時代になり「妖怪の存在は科学的に証明できない」という理由により妖怪の存在を否定するようになったのである。

小松によれば、２０世紀も終わろうとする頃、人々は近代的な社会はとてもストレスがたまるということに気づき始めたと言う。そして、「発展」という名のもとに私たちは何か「とても大切なもの」を失ってしまったのではないかと疑い始めたとする。

私たちが制圧してきた「闇」の文化のなかに私たちの生活に必要なことも含まれていたのではないか。

・・中略・・

人間を幸福にするはずであった近代の科学的文明・合理主義が頂点にまで到達したという現代において、多くの人々がその息苦しさ、精神生活の「貧しさ」（精神的疲労）を感じ、将来に漠然とした「不安」を抱いているということを思うと、逆に「原始的」とか「呪術的」とか「迷信」といったレッテルを貼って排除してきたもののなかに、むしろ人間の精神にとって大切なものが含まれているともいえるのかもしれない。

昔の人は現実世界で何か不吉なことや不幸な事件があると、その原因を死後の世界や死者の魂の存在に結びつけて考えていた。そうすることにより、人間の力では「どうにもならないこと」であると納得したり、あきらめることによって、自分の感情をコントロールしてきた。昔の人は、『遠野物語』で語られるような話を日常的に耳にすることにより「負の出来事」や「闇の世界」に対して「リアリティ」を持つ能力を身につけ、実際に自分がそのような事態に陥ったときに精神的な安定を保っていた。つまり、「負のリアリティ」を持つということは「生のリアリティ」を持つことと［　A　］なのである。

「妖怪は存在する」という知は、子どもたちに対する家庭教育の場でもしばしば活用されていた。「嘘（うそ）をつくと鬼に舌を抜かれるよ」ということは、私も幼い頃よく母親から言われていた。さらに、「山道には様々な妖怪が出るので夜に歩くのは避けなさい」「川の深みにはカッパが棲んでいるので近づかないように」などは自然の恐ろしさを子どもたちに教育するために使われた。つまり「妖怪が存在する」という知は、人間と自然の関係をうまく保つための「知」でもあった。

「妖怪」が人々の心の中に生きていた頃、人々は「複雑な対象」や「あいまいな対象」を無理に分析したり詳しく理解しようとはせず、そのまま受け入れていた。しかし、私たちは学校教育や社会の常識により、「真実」を知るためには対象を明確に、そして客観的に捉えなくてはならないという「思い込み」を持たされてしまった。そして、それまでは暗闇の中でしか見ることがなかった対象に対し強い照明を当てることにより、隅々まで㋓センメイに分析しようとしてきた。また、それまでは「複雑なもの」は複雑なままに、「あいまいなもの」はあいまいなままに受け入れてきた対象を強制的に細かく分解したうえで、そのひとつひとつの要素を明らかにしようとしてきた。そうして私たちは、「複雑な対象」や「あいまいな対象」、そして「妖怪」や「闇の世界」を排除してきたのである。

昔の人は「なま暖かい風」を感じると、そこに「妖怪」や「幽霊」を感じていた。しかし、今の私たちはたとえ「なま暖かい風」が吹いたとしても、そこに「妖怪」どころか「異様な雰囲気」すら感じることはない。つまり、私たちが今生活している現実世界に妖怪がいなくなっ

たのは、異様な情報を受け取ったとしても、私たちは何も生み出せなくなったからである。

私たちはすでに、１９９５年に阪神淡路大震災、２０１１年に東日本大震災を経験した。そして、２０２０年からの「新型コロナウイルス」の世界規模の感染拡大である。そこでは、多くの人々が身近な人の「死」を実際に体験した。さらに今後も、私たちは人類生存の危機とも言えるような様々な「負の出来事」と遭遇することになるだろう。しかし、そのような「負の出来事」と遭遇したとき対処できるような[3]「時間の厚み」を持った「知」を、今の私たちは持っていない。

【Ⅰ】

『遠野物語』の検討を通してあらためて感じることは、「知」が持つ「時間の厚み」の重要性である。『遠野物語』で語られる話は、時を越えて遠野という地域の人々に語り継がれている実際に起こった話、つまり遠野の人々の「記憶」の伝承である。そこには、自分の父や母、祖父や祖母、そして先祖が実際の生活の中で経験したことや感じ取ったことが、その後代々伝わる子孫の生活の中で受け継がれている。そして、場合によっては新たな「知」が付け加えられ、また場合によっては部分的に書き換えられて受け継がれてきたのである。したがって、その「知」には「時間の厚み」が感じられる。

【Ⅱ】

また、それは人間ひとりでは生きていけない時代に「地域」の中で生活していくための「知」でもあった。例えば、自分の考え方や価値観とは異なっていたとしても、その地域の習慣や「しきたり」に従わなければ生きてはいけなかった。「私個人の知」よりも、「地域コミュニティの知」が優先されていた。そしてそれは、お祭りなど様々な日常的な出来事を通して、身体にしみ込むように記憶されてきた「知」なのである。

【Ⅲ】

戦後の日本社会が受け入れてきたのは、客観的に正しいことが証明可能な「普遍的な知」であり、「合理性や効率を重視する知」であった。それは同時に、「記号で表象することができる知（[b]「0」と「1」の組み合わせで表現することができる知）」でもある。「記号で表象することができる」ということは、テクノロジーで処理や操作が容易に行うことができることを意味する。そして、それらの「知」は科学研究やテクノロジーの発展により日々古いものになっていき、日々新しいものに「上書き／書き換え」られてきた。

【Ⅳ】

このような「知」はまた、日本の高度経済成長期の価値観とも一致していた。できるだけ多くの最新の知識をできるだけ速く獲得した者が、高度経済成長の競争の中で勝ち残ることができた。しかも、「記号で表象することができる知」は容易にテクノロジーでも扱えるが故に、

「 B 」においてもコウ㊥ケンすることができた。あらゆる情報がインターネットを経由して瞬時に、世界中の人々に共有される。

【V】

しかし私は今、このような「近代的な知」を基礎として発展してきた社会に対して大きな「脆弱性（ぜいじゃくせい）」を感じている。この「知」は右肩上がりの発展を遂げているときには良いものだったが、一旦何かが起こったときには非常に「脆（もろ）くて弱い知」であることを実感している。そして、そもそも「知」というものは、その都度「上書き／書き換え」られるようなものではなく、時間の経過とともに「積み重なるもの」でなければならない。「知」が「積み重なる」ことにより、「知」には「時間の厚み」が感じられるようになる。

（渡部（わたべ）信一『「AI＝知」への逆襲：日本文化論の視点』より）

（注1）井上円了　――　仏教哲学者、教育者（一八五八～一九一九）。
（注2）柳田国男　――　民俗学者（一八七五～一九六二）。
（注3）石井　――　文学研究者である石井正己（一九五八～）のこと。
（注4）内山　――　哲学者である内山節（たかし）（一九五〇～）のこと。

問1　二重傍線部㋐～㋔の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。
解答番号は ㋐ 1 、㋑ 2 、㋒ 3 、㋓ 4 、㋔ 5 。

㋐ ボクメツ

① ジュンボクな人柄
② ゲボクとして働く
③ 胸部をダボクする
④ 隣国とワボクする
⑤ スイボクガの描き方

㋑ シワザ

① ゴウガン不遜な態度
② 柔よくゴウを制す
③ ヒゴウの死を遂げる
④ ゴウに入ってはゴウに従え
⑤ ドゴウが乱れ飛ぶ

㋒ カイニュウ

① イッカイの市民に過ぎない
② 店をカイソウする
③ ケッカイを築く
④ 販路をカイタクする
⑤ ホンカイを遂げる

㋓ センメイ

① センパクな知識を振り回す
② プロのセンレイを受ける
③ あくびがデンセンする
④ 研究にセンネンする
⑤ センレツな印象を受ける

㋔ コウケン

① リケンをむさぼる
② 参考ブンケンを集める
③ 責任をソウケンに担う
④ ガラスをケンマする
⑤ 晴雨ケンヨウの傘

問2　二重傍線部a、bの言い換えとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は a [6]、b [7]。

a
① 固定観念　② 世界観　③ 人間性　④ 生態環境　⑤ 先入観

b
① リアルな知　② リベラルな知　③ プリミティブな知　④ デジタルな知　⑤ アナロジーな知

問3　空欄 A 、 B を補うのに、最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は A 8 、 B 9 。

A　① 二律背反　② 合従連衡　③ 一視同仁　④ 同工異曲　⑤ 表裏一体

B　① グローバル化　② ボーダーレス化　③ ポストモダン化　④ マニュアル化　⑤ バーチャルリアリティ化

問4　次の段落を挿入する場所として最も適当な位置を、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。解答番号は 10 。

こうして戦後日本社会では、「記号で表象することができる客観的・普遍的な知」や「合理性や効率を重視する知」が積極的に採用されてきた。これは逆に言えば、「記号で表象することが困難な知」は無視されるか、意識的に排除されてきたのである。

①【Ⅰ】　②【Ⅱ】　③【Ⅲ】　④【Ⅳ】　⑤【Ⅴ】

問5　傍線部1「柳田国男の『遠野物語』とあるが、柳田はなぜ『遠野物語』を書いたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。解答番号は 11 。

① 妖怪は実際いると考えている地方の人々は、どのような教育環境のもとで信じるに至ったのかを調べるため。
② 井上円了は妖怪を科学的に研究したが、そのような研究は江戸時代からあって、二番煎じだと批判するため。
③ 妖怪は「実在しない」にも関わらず、妖怪を見てしまう人間の心の内を知ることが重要であると考えたため。
④ 科学が未発達な時代の人々は、どのような迷信のもとで精神的に不安な日々を送っていたかを調査するため。
⑤ 井上円了は『妖怪学講義』で迷信や妖怪を否定しているが、妖怪はリアルな存在であることを実証するため。

問6　傍線部2「1965年以前、日本の各地でたくさんの人間がキツネにだまされていた」とあるが、なぜだまされていたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。解答番号は 12 。

① 人間の力ではどうにもならないことに遭遇したときに、キツネにだまされたと考えることで、現実的に対処することができたから。
② 自然が開発されて、伝統的な精神が衰弱しはじめたときに、キツネにだまされることで、「闇の世界」の大切さを自覚できたから。
③ 科学的に証明できない事態が起こったときに、キツネにだまされたと考えることで、事実ではなかったとすることができたから。
④ ストレスをためて精神的に疲労を感じたときに、キツネにだまされたと考えることで、感情をコントロールすることができたから。
⑤ 何か不吉なことや不幸な事件が現実に起こったときに、キツネにだまされたと考えることで、精神の安定を図ることができたから。

問7　傍線部3『時間の厚み』を持った『知』とあるが、これはどのような「知」なのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。解答番号は 13 。

① 地域の「習慣」や「しきたり」として長い時間かけて作られてきた、誰もが従わなくてはならない「知」。
② 客観的に正しいことを証明できないかもしれないが、生活の中で日々記憶として受け継がれてきた「知」。
③ 先祖が観念的に構築し、代々子孫に語り継がれてきた、生活していくために欠かすことができない「知」。
④ 記号として表象することが困難ではあるが、合理性があり、効率的に生きていくうえで大切である「知」。
⑤ 一個人の考え方に基づくものではなく、コミュニティの中で優先される、日々新しく上書きされる「知」。

問8　本文の内容と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。解答番号は 14 。

① 戦後の日本は、人類生存の危機である「負の出来事」に対処する知の構築に努力してきたが、結果は出ていない。

② 「合理性や効率を重視する知」を、「時間の厚み」を持った「知」に、これからは書き換えていく必要がある。

③ 柳田国男の『遠野物語』は、遠野という地方において語り継がれてきた虚構を集めてつくられた調査書である。

④ 何もかもを分析的に捉える必要はないものの、あいまいなものをあいまいなまま放っておくことは、問題が多い。

⑤ 科学的に解明することができないかもしれないが、人間の精神にとって「闇の世界」は大切な意味を持っている。

第2問　次の文章を読んで、後の問い（問1～問8）に答えなさい。なお、設問の都合で本文の段落に 1 ～ 13 の番号を付してある。また、設問の都合上、表記を改めたところがある。

1　私は、他のいかなるものでもないこの〈私〉であるとともに、[1]人間である。私が自分自身を意識するというようにして存在するのは、私が人間であり、人間として生きていることに基づく。他の生き物はどのようなものであれ、自分のことを〈私〉と呼ぶことがない。人間だけが自分のことを〈私〉と呼ぶのである。このことによって、人間は他の生き物から区別される。人間以外の生き物は、たとえ本能に基づいて獲物を欲するにしても、その場合「私は～を欲する」と言うことがない。これに対し、人間の場合、たとえどれほど些細なものを欲し求めようとも、「私は～が欲しい」とか、「私は～を欲する」という。喉が渇いたときに冷たい飲み物を求める場合であれ、小腹がすいて菓子パンやお菓子に手を伸ばすのであれ、店の前を通りがかってふと目に入ったものが思わず気に入った場合であれ、「私は～を欲する」わけである。

2　注意すべきことに、ひとはただ何となしに何かを欲し求めるのではない。そうではなくて、自分が何を欲し求めているかを理解した上で欲するのでもある。こうした理解のうちには、自分自身についての意識が認められる。自分はあれこれのものを欲し求めているのだと自覚した上で、そのことをはっきりと言い表すこと、このことは意思のはたらきを意味する。何を得ようとするのか、何を求めるのか、何を行うのか。これらいずれの場合でも、人間は一般的にいって、「私は～する、～したい」というようにして自らの意思を表明する。

3　人間にはこのように、他の生き物から区別されるような際立ったあり方が認められる。こうしたあり方こそ、古代ギリシアの哲学者アリストテレスが人間のことを〈理性的動物（ゾーオン・ロゴン・エコン）〉と定義する場合に念頭に置いていたものである。ギリシア語で「理性」に相当する言葉はロゴスである。[a]ロゴスには「言葉」や「比、割合」や「根拠、理由」などといった、きわめて幅広い意味がみられる。1対2や2対3などの割合も、古代ギリシア語では「ロゴス」という言葉によって示されるのであり、さらには、「ヨハネによる福音書」の有名な冒頭部分の「はじめにことばがあった、ことばは神とともにあった、ことばは神であった」という聖句における「ことば」も、古代ギリシア語では「ロゴス」なのである。裏返していえば、ロゴスという言葉は古代ギリシア人にとって、きわめて多様な領域や連関において身近であったといえる。これらはいずれも別々に切り離されているのではなく、むしろ一つの大きな連関のもとにある。それは［　あ　］、物事を筋道立てて考え、問題となっている事柄を一つ一つの要素に区別し、これらの要素を通覧することで、物事の本質を見定めたり、何を行うべきなのかを決定する、ということである。人間は言葉によって自らの思考や行為を導くのである。

4　古代ギリシア社会では、〈ロゴン・ディドナイ〉ということがきわめて重視されており、アテナイであれ、スパルタであれ、あるいはそれ

以外のポリスであれ、市民たる者が身に付けるべき当然の態度であるとされていた。この「ロゴン・ディドナイ」を日本語にすると、「理由を与える、根拠を示す」ということである。自分がこれから何をしようとしているのか、現にいま何をしているのか、なぜこれこれのことをしたのか、いずれの場合でも他の相手が納得できるような申し開きをすることが出来る、ということが古代ギリシア人にとってきわめて重要なことであった。だからこそ他ならぬギリシアにおいて、哲学という、物事の〈なぜ〉を問う営み、言い換えると、物事の原因や本質を探究する営みが成立し、発達したのであった。

5 理性はこのように人間を際立たせる根本的特徴をなすとともに、近代という時代を特徴付けるものでもある。近代ドイツの哲学者であるカントは、理性について[b]他に類を見ないほど徹底的な考察を行った人物である。『純粋理性批判』はカントの主著というべき書物である。カントはその中で、理性のことを「諸原理の能力」と規定し、さらに「諸概念を通じて、普遍的なものにおいて特殊的なものを認識する」はたらきとして特徴付けている。それによれば、理性は何かを観察することや、観察した結果をまとめて規則化・法則化することに関わるのではなく、［　い　］さまざまな法則が導き出される際の基本となる出発点としての原理に関わる。「悟性の諸規則を諸原理のもとに統一化するところの能力」という特徴付けは、理性が認識のはたらきを全体的に包括することを意味する。「統一」のはたらきこそ、理性の根本特徴をなすというのである。

6 さまざまなものを統一化し、一つのまとまりのもとへともたらすということは、一見ばらばらに見えるさまざまな事象のうちに連関を見出し、その連関を成り立たせる秩序を明らかにすることを意味する。このようなことは、個々の事象に直接かかわるよりもより高次の認識の段階を指し示している。「我々のあらゆる認識は諸感覚からはじまり、そこから悟性へと至り、そして理性で終わる」という有名な言葉は、人間の認識のうちに感性・悟性・理性という三つの段階があることを示している。カントはこのように語ることによって、およそ人間である限りでの誰にとっても[2]理性という能力が本来備わっており、身の回りのものを観察するというごく自然なことから出発して、この能力を自らのものとすることが出来る、ということを言い表そうとしているのである。

7 理性という能力は、認識のはたらきだけに関わるのではない。さまざまな規則や法則を統一化し、秩序付けるというそのはたらきは、行為の場面においても決定的な役割を果たす。だからこそ、カントは「理論的理性」のみならず、「［　A　］理性」についても語るのである。ひとはさまざまな行為を行うにあたっても理性的なのであって、自らの理性にしたがって振る舞うのである。本当の意味でそのひとの行為であるといえるのは、当の本人が自分で行おうと考え、実際に行うことを決定し、あらかじめ考えたところに基づいて自ら遂行するものに限られる。

8 自ら望まないようなこと、なんとなくいわば無意識のうちにすること、他の動物と同じように本能に導かれるがままにすること、これら

は本来的には行為とは呼ばれ得ない。子ども用のおもちゃでも対象年齢が設けられていたり、子どものすることに対して親が監督者として責任をもつというのは、子どもが十全な意味においては〈行為をする〉とはいえないからなのである。つまりその時その時に自分が何をしているのかを分かってはいても、それをなぜするのか、誰のためにするのか、何を用いてするのか、いつするのか、などといった複雑多岐にわたり絡み合う事柄を見通した上で何かを行うわけではない、ということなのである。人間に備わる理性という能力が十全に発揮されるには、カントが述べるように、まずは感覚の段階から出発して悟性へと至り、その上で理性にまで到達するようにして、次第に育んでいく必要がある。

9 カントの哲学は哲学のみならず、同時代の芸術や文化に対してもきわめて多大な影響を与えたが、それは主として[3]道徳の文脈においてである。そのことはたとえば、フリードリヒ・フォン・シラー（一七五九～一八〇五）やベートーヴェンの作品のうちに顕著に見て取れる。なかでも、〈自由〉を哲学の中心問題であるとして提示したのは、きわめて重要な洞察であり、それまでの哲学の歴史にみられなかったことである。理性が自由であるというのは、その活動が純粋な自発性に基づいており、自分自身に立脚して自分自身から発するようにして振る舞うのであって、他のいかなるものにも依拠しないということである。身の回りを取り巻くさまざまなものに左右されることなく、自らの考えるところにしたがって行為するということ、自らが打ち立てた原理や原則を堅持すること、カントが自発性ということで言い表そうとするのは、まさにこうしたことである。ここで『道徳形而上学の基礎付け』の言葉を引いてみよう。

「人間は自分自身のうちに現実に、ある一つの能力を見出すのだが、この能力によって自分自身を他のあらゆる事物から区別するとともに、自分自身から区別しさえするのだが、そのことは、諸対象によって触発される限りでのことであって、そしてこうした能力とは、理性のことである。理性は純粋な自己活動性としてみるならば、まさにその点において、悟性さえも超えるものである」。

10 〈自分自身からはじめる〉というのはきわめて当たり前のこと、何も特別な困難を伴うことのないものに思われるかもしれない。

［　う　］、〈私〉はこうした境地に至るまでさまざまな経験を重ねる必要があり、多くの過程を経てはじめて到達されるのである。

11 ひとはさしあたり今行っていること、今考えていることに注意を向けるだけにとどまり、それが何を目標としているのか、どのような規則や条件にしたがっているのか、どのような立場に立って行っているのか、ということにまで注意を向けるまでには至らない。こうしたこと全てをそれぞれ理解した上で、適切な仕方でそれぞれに対処することは、相応の経験を重ねたうえではじめて可能となる。

12 このことは、たとえば認識の場合、自然科学では何度となくさまざまな角度から実験を行い、検証をした上ではじめて仮説を立てるこ

とが可能であるということからも明らかであるし、また法律の場合、刑事事件で判決を下すことは、必要な証人や証拠をすべて集めたうえで、本当に証言や証拠として十分なのかということについて、何度も審理を行ったうえではじめて可能となることからも明らかである。また芸術の場合でも、本当の意味ですぐれた指揮者となるには、指揮する曲を隅々まで熟知しているとともに、演奏するオーケストラの弦楽、木管、金管および打楽器など、それぞれのパートについても特性や演奏者の個性を把握している必要がある。そのため、指揮者が円熟の境地に達するのは、個々の楽器の奏者よりもずっと後になってからのことがほとんどである。ヴァイオリンやトランペットやクラリネットなどの奏者がすでに引退するような年齢になってはじめて、[B]演奏を繰り広げるようになる指揮者は決して稀(まれ)ではない。

[13] カントが自由という場合に特徴的なのは、〈意志〉としての側面を強調する点である。人間は何をしてもよいという意味で自由であるのではない。何でもしてよいというのは、気ままや勝手を意味するのであって、そのようなことは本当の意味では自由の名に値しない。そうではなくて、自分が何を行おうとしているかということや、何を目指してそうするかを理解し、自覚するというあり方こそ、自由の名に値するというのである。自らの自発性に基づいて自由に行為することはカントによれば、意志に基づいてなされる。カント哲学の入門書としての性格も備えている『道徳形而上学の基礎付け』の第三章の冒頭の箇所には、「自由の概念は、意志の自律を説明するための鍵である」という有名な表題が与えられている。

（嶺岸佑亮(みねぎしゆうすけ)『自己意識の哲学――私が私であることとは――』より）

問1 空欄[あ]～[う]を補うのに、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号はあ[15]、い[16]、う[17]。

① だが　② あるいは　③ むしろ　④ しかも　⑤ すなわち

問2　二重傍線部aの対義語、bの類義語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は a 18 、b 19 。

a　① エートス　② バイアス　③ カオス　④ パトス　⑤ リアル

b　① 波乱万丈　② 前代未聞　③ 旧態依然　④ 荒唐無稽　⑤ 千古不易

問3　空欄 A 、 B を補うのに、最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は A 20 、B 21 。

A　① 実践的　② 倫理的　③ 自律的　④ 客観的　⑤ 能動的

B　① 謹厳実直に　② 奇想天外な　③ 一心不乱に　④ 融通無碍（むげ）な　⑤ 威風堂々とした

問4　本文を二つの段落に分けるとすると、二つ目の段落はどこから始まるのか。その番号として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。解答番号は 22 。

① 5　② 6　③ 7　④ 8　⑤ 9

問5　傍線部1「人間」とあるが、人間とはどのような存在であるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。解答番号は 23 。

① 人間とは、神のことばに導かれることによって、論理的な思考を働かせ、何を行うべきかを決定する存在である。
② 人間とは、自分自身についての意識を自らで認識して、それを明確に表明する意思のはたらきをもった存在である。
③ 人間とは、本能に基づいているため欲することがない動物とは違い、「私は～が欲しい」と欲望をもつ存在である。
④ 人間とは、感情に左右されることが一切なく、何事をも分析的に捉え、筋道立てて考えることができる存在である。
⑤ 人間とは、ただ何となく物事を行うことはなく、どれほど些細なことに対してでも意識的に行動する存在である。

問6　傍線部2「理性という能力」とあるが、これはどのような能力なのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。解答番号は 24 。

① 理性とは、自分がなぜこのようなことをしたのかを、言葉を巧みに用いることによって、他者を説得するための能力である。
② 理性とは、物事の本質を見定めたり理由を考えたり根拠を示したりする、社会でよりよく生きるためには必要な能力である。
③ 理性とは、多様な領域や連関において機能し、近代になって、人間を他の生物と区別するものとして認識された能力である。
④ 理性とは、市民たる者が身につけるべきもので、身の回りの物を観察することにより、そこから法則を導き出す能力である。
⑤ 理性とは、人間に本来備わっていて、さまざまなものを統一化し、まとまりをつける、感性や悟性よりも高次な能力である。

問7　傍線部3「道徳の文脈」とあるが、カントは道徳の文脈でどのようなことを言ったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。解答番号は 25 。

① さまざまな経験を重ね、〈自分からはじめる〉という自発性を身につけることで、画期的な作品をつくることができるということ。
② 自由に何をしてもよいのが人間であり、自分以外のいかなるものにも従うことなく、恣意的に行動することができるということ。
③ 一旦自らが打ち立てた原理や原則は絶対に破ることなく、守り通すだけの強い意思を持つことが、非常に大切であるということ。
④ 自分が何を行おうとしているかを理解し、自覚していることが自由であり、それは自らの意志に基づくものであるということ。
⑤ 自分がどのような規則や条件にしたがっているかに注意を向けて、その規則や条件から自由になることが重要であるということ。

問8　本文の内容と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。解答番号は 26 。

① 子どもは、自分が今何をやっているのかが分かっておらず、親から言われるがまま、単に行動しているだけの存在である。
② 古代ギリシアでは、ロゴスという言葉を一義的に用いることで、他の生き物から区別される人間の特徴を表すことができた。
③ 古代ギリシア人にとって、理由を与えたり根拠を示したりすることが重要だったので、哲学が成立し発達することになった。
④ カントは、哲学だけではなく道徳でも、さらには芸術や文化においても、すぐれた能力を発揮していた、多彩な人物である。
⑤ すぐれた指揮者は、弦楽、木管、金管、打楽器など全ての楽器に長けてこそ、円熟の境地に達した指揮をすることができる。